

別冊 太陽

日本のこころ 50

創刊五十号記念

宮沢賢治

銀河鉄道の夜

対談

天沢退二郎・別役実

「ジョバンニとカムネラ 出会いと別れ」

特別企画

『銀河鉄道の夜』街絵図

特別付録

大銀河系アトラス（折込み）

SUMMER'85

宮沢賢治

銀河鉄道の夜

『銀河鉄道の夜』

本文と解説

一、午後の授業

銀河系(斎藤文二)／クオレの影響(天沢退二郎)／教師としての賢治(天沢退二郎)／ホランの広場から(天沢退二郎)

六、銀河ステーション

「セロのやうな声」の削除(天沢退二郎)／銀河の爆発(天沢退二郎)／銀河鉄道伝説(別役実)／月長石とリンドウ(板谷英紀)

二、活版所

「活版所」初案(天沢退二郎)／怪しい工場の匂い(別役実)／活版所と大都会(天沢退二郎)

七、北十字とブリオシン海岸

白鳥座(斎藤文二)／春と修羅(序詩(天沢退二郎)／詩(露露古(天沢退二郎)

三、家

《標本》について(天沢退二郎)／模型機関車(井上昭雄)

八、鳥を捕る人

鳥捕りの風景(長谷川博)

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニの独白(天沢退二郎)／星座早見(星座図(斎藤文二)／ジョバンニの孤独(天沢退二郎)／銀河のお祭り(別役実)

九、ジョバンニの切符

二人の切符(天沢退二郎)／アルビオ観測所 白鳥座のベータ星(斎藤文二)／アルビオ観測所 二対の宝石(板谷英紀)／三人の少女(天沢退二郎)／近代科学技術への警鐘(タイタラク号の悲劇(井辻朱美)／黒服の青年の語り(天沢退二郎)／「苹果」のアンソロジー(天沢退二郎)／賢治童謡集(天沢退二郎)／「銀河鉄道の夜」の最初稿(天沢退二郎)／「生よみもとにちかづかん(佐藤泰平)／「新世」する初期形(天沢退二郎)／「かすか」かすかな(佐藤泰平)／インディアン(板谷英紀)／「板谷英紀」の歌(天沢退二郎)／「ふた」座(斎藤文二)／「そり座」(斎藤文二)／「ハレ」の唱和(佐藤南十字座(斎藤文二)／ケンタウルス座ウルク座と暗(斎藤文二)／もう一つのラスト(天沢退二郎)／「レオ」星団(斎藤文二)／電気嵐の歌(天沢退二郎)／ラスト・カム・ハネラ(天沢退二郎)

五、天気輪の柱

天気輪の柱「ブリュッセルの柱説(別役実)／天気輪の柱「太陽柱説(根本順吉)／天気輪の柱「輝くばかりの七色の塔説(斎藤文二)

カラーコラム

銀河鉄道はどこを走るか

十字架から十字架へ

宝石の絵具

タイム・トンネル

賢治と地質学

ビーカーの中の銀河

イーハートヴオの土に生きて

賢治の花壇

音楽の世界

賢治と宗教

「空のひび」

カム・ハネラととし子

イーハトヴ逍遙

賢治 こころの旅路

手紙で辿る三七年の生涯

対談 ― 天沢退二郎・別役実

「ジョバンニとカム・ハネラ 出会いと別れ」

音楽の世界

賢治と宗教

「空のひび」

カム・ハネラととし子

『の夜』街絵図

ますむらひろし

アトラス

近刊案内・別冊太陽既刊案内
付録解説・編集室・次号予告・お知らせ

THE SUN
Special Issue
No. 50 Summer '85

I. Kenji Miyazawa's *Ginga Tetsudo no Yoru* (The Night of a Milky Way Train)
 In his short life, Kenji Miyazawa, a talented Japanese poet, left behind a masterpiece called *Ginga Tetsudo no Yoru* in juvenile literature. Although he worked over until just before he died, this unfinished work still contains a number of riddles. Which way did the train take? What is "Tenkirin"? What are Giovanni and Campanella? In this special issue, the last 83 manuscripts are printed. Together with many pictures, illustrations, and columns on various topics, Taijiro Amazawa and Minoru Betsuyaku re-examine this work with new insight.

II. A Walk in *ĪHATOV*
 No one can talk about Kenji Miyazawa's works such as *Kaze no Matasaburo*, *Gusukōvdori no Denki*, and *Nametokoyama no Kuma* without referring to the severe climate of Tohoku area. With a sketch-book in hand, Tamio Kaneko walks around Mt. Iwate, Kitakamigawa (The River Kitakamigawa), Koiwai pasture, Sanriku Seashore which became the scenes of Kenji Miyazawa's works.

III. Letters of Kenji
 His letters to his father, beloved sister and religious teacher in chronological order reveal his personal history of mental life.

IV. Giovanni and Campanella: Their encounter and departure, discussed by T. Amazawa, M. Betsuyaku.

Special supplement: The atlas of the milky way

Editor-in-Chief: Yoji Takahashi

●掲載資料・編集協力者一覧

朝日新聞／天沢退二郎／磯貝吉紀／板谷英紀／井上昭雄／国立科学博物館(村山定男)／国立国会図書館／佐藤泰平／近山晶／筑摩書房／天賞堂／日本近代文学館／細野澄／堀内位智子／堀尾青史／本地陽彦／松山資郎／宮沢賢治記念館／宮沢清六／明治新聞雑誌文庫／山崎喜陽／横山隆一
 (五十音順 敬称略)

写真＝藤井 旭(6・7・39・54・76・77・81・84・85・88・89頁)

若月 勤(3・40・41・55頁) 近山 晶(36・37頁)

垂見健吾(64頁) 芳賀日出男(17頁) 本誌写真部

星座絵図＝スタジオ・スロツス

編集＝高橋洋二・久田肇・岡みどり・澤田陽子・秋山礼子
 レイアウト＝寺田有恒・藤代 茂 校正＝荒尾克己

宮沢賢治

銀河鉄道の夜

永遠に夜空を走る銀河鉄道そのままに
『銀河鉄道の夜』もまた、未完のまま
輝いている。八三枚の原稿は、死に
至るまで、幾度となく手が加えられた。
創作メモ、第一稿……賢治が残した
一言一言に、新たにスポットを当て、
この稀有の名作の全貌を解明する。

天沢退二郎 根本順吉

板谷英紀 萩屋 薫

井辻朱美 長谷川博

井上昭雄 別役 実

斎藤文一 ますむらひろし

佐藤泰平 宮城一男

佐藤泰正

銀河鉄道の夜

の
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

なにし
ふん
のふん
はか
うい
この
わ

~~1 x 3
 2 い 3
 3 3
 4 3
 5 12
 6 11
 7 大 e
 8 白 e
 9 大 e
 10 大 e
 11 大 e
 12 大 e
 13 大 e
 14 大 e
 15 大 e
 16 大 e
 17 大 e
 18 大 e
 19 大 e
 20 大 e
 21 大 e
 22 大 e
 23 大 e
 24 大 e
 25 大 e
 26 大 e
 27 大 e
 28 大 e
 29 大 e
 30 大 e
 31 大 e
 32 大 e
 33 大 e
 34 大 e
 35 大 e
 36 大 e
 37 大 e
 38 大 e
 39 大 e
 40 大 e
 41 大 e
 42 大 e
 43 大 e
 44 大 e
 45 大 e
 46 大 e
 47 大 e
 48 大 e
 49 大 e
 50 大 e
 51 大 e
 52 大 e
 53 大 e
 54 大 e
 55 大 e
 56 大 e
 57 大 e
 58 大 e
 59 大 e
 60 大 e
 61 大 e
 62 大 e
 63 大 e
 64 大 e
 65 大 e
 66 大 e
 67 大 e
 68 大 e
 69 大 e
 70 大 e
 71 大 e
 72 大 e
 73 大 e
 74 大 e
 75 大 e
 76 大 e
 77 大 e
 78 大 e
 79 大 e
 80 大 e
 81 大 e
 82 大 e
 83 大 e
 84 大 e
 85 大 e
 86 大 e
 87 大 e
 88 大 e
 89 大 e
 90 大 e
 91 大 e
 92 大 e
 93 大 e
 94 大 e
 95 大 e
 96 大 e
 97 大 e
 98 大 e
 99 大 e
 100 大 e~~

陸

みなさんへ

先生は

思ふ
 生
 世
 の
 世

すなはち

黒板に

たけな
世に
いふ
の

5

乙
 ぬ
 へか
 しん
 7 四

いふ

2 白
12 7 14

かけました
が、

あ
け
ま
あ
あ

7
x
2
h
T
2

は ち
3
2
1 1

カ
ム
シ

まじった

し
の
で
し
す

20

と 遠ま

王

70
3
H. 302

25171

11/22/20

九

27

飛

い
e

一、午後の授業

「ではみなさんは、さういふふうに川だと云はれたり、乳の流れたと云はれたりしてゐたこのぼんやりと白いものがほんたうは何かご承知ですか。」

先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけふった銀河帯のやうなところを指しながら、みんなに間をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四五人手をあげました。ジョバンニも手をあげやうとして、急いでそのまゝやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろはジョバンニはまるで毎日の教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないといふ気持ちをするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

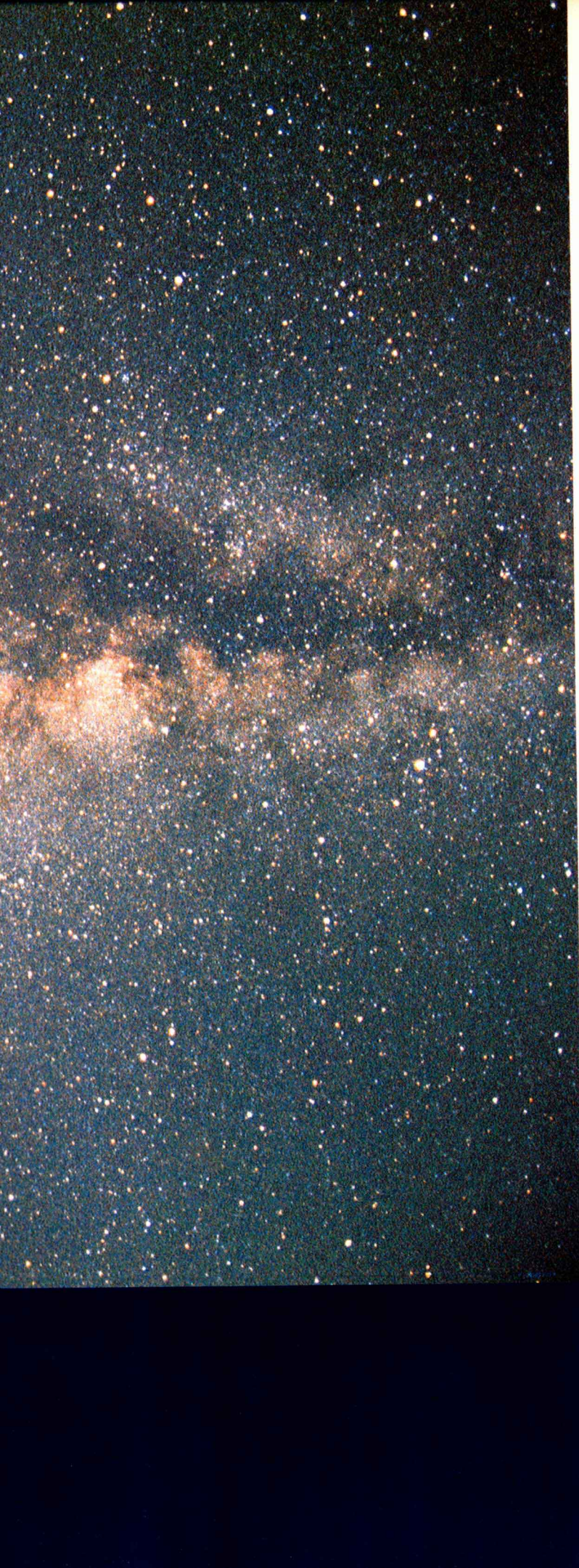
「ジョバンニさん。あなたはわかつてゐるのでせう。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答へることができないのでした。サネリが前の席からふりかへって、ジョバンニを見てくすつとわらひました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になつてしまひました。先生がまた云ひました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でせう。」

やっぱり星だとジョバンニは思ひましたがこんどもすぐに答へることができませんでした。

先生はしばらく困つたやうすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもちもち立ち上つたまゝ、やはり答へができませんでした。





銀河系

銀河系は、恒星、球状星団、散開星団、ガス星雲、星間物質などからなる一大集団。その形は中心核を持つ円板状で、円板部は渦巻き回転をしている。銀河中心は、いて座の方向にあり、太陽系から約三万光年の距離。全銀河系は、ここを中心にして回転する。白鳥、いて、さそり各星座のあたりは、他のどの部分よりも圧倒的に星団や星雲が密集しており、この銀河構造こそ宮沢賢治の関心を強くとらえた。賢治の銀河体験とはそういうものである。

(斎藤文一 新潟大学教授
理学博士)

先生は意外なやうにしばらくちっとカムパネルラを見てゐましたが、急いで「では、よし。」と云ひながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな、望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんさうでせう。」

ジョバンニはまっ赤になつてうなづきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。さうだ僕は知つてゐたのだ、勿論カムパネルラも知つてゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあつたのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもつてきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかつたのに、すぐに返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになつたので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がつてわざと返事をしなかつたのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあはれなやうな気がするのです。

先生はまた云ひました。

「ですからもしもこの天の川がほんたうに川だと考へるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考へるならもっと天の川とよく似てゐます。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでゐる脂油の球にもあたるのです。そ

んなら何がその川の水にあたるかと云ひますと、それは真空といふ光がある速さで伝へるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでゐるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでゐるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちやうど水が深いほど青く見えるやうに、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集つて見えしたが、白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい。」

先生は中にたくさん光る砂のつづの入つた大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちやうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じやうにじぶんで光つてゐる星だと考へます。私どもの太陽がこのほゞ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まはすとしてみなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわづかの光る粒即ち星しか見えなないのでせう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるといふこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまさまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではこゝまでです。本やノートをおしまひなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあげたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立つて礼をすると教室を出ました。

『クオレ』の影響

イタリアの少年小説『クオレ』（デ・アミチス作、一八八六）には、アルバイトをする貧しい少年の話、級長へのひそかな友情、難破船からボートへ乗りうつる最後の機会を道連れ少女に譲る少年の話、アメリカへ出稼ぎに行つていたというが実は監獄に入つていた父をもつ少年の話、川で溺れかかつた友を死を賭して救つた少年の話など、『銀河鉄道の夜』を連想させる挿話が少なくない。イタリア風の人物名といい、賢治の発想に『クオレ』の影を読むことは的外れではあるまい。

（天沢）

さて話もそろそろ盡きた頃、

「今こんなのも書きかけてるがどういうものでしょう。

子供等にはわかるようだが」

宮澤さんはオーバーのポケットから一握りの原稿を出しかけてゐる。その顔は長時間の倦怠の色もなく、さも楽しそうである。

「どんなのだス」

「銀河旅行ス」

「ワア、銀河旅行すか、おもしろそうだな」

「場所は南欧あたりにしてナス。だから子供の名などもカンパネラという風にしあんした」

それからストーリーのあらましの説明がある。

「まんず読んで見ねえすか」

「読んでみええすか、でも少し長いから退屈させるとわるいな」

「ヤ、かまねえ、かまねえ」

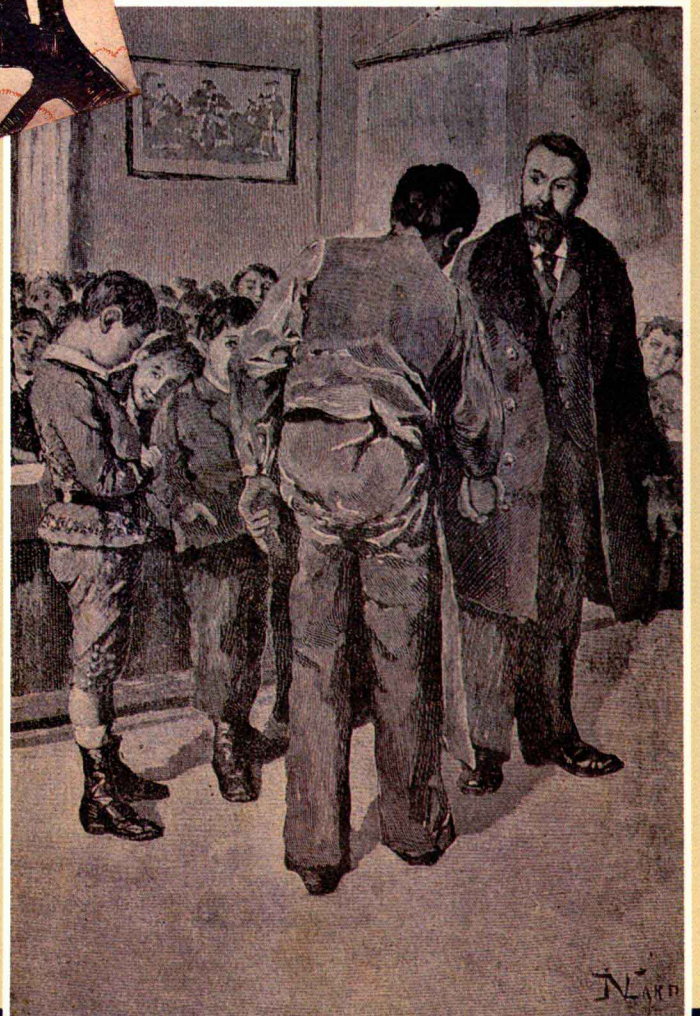
前田晃訳 『世界少年文学名作集第二二巻
クオレ』(家庭読物刊行会 大正九年刊)挿絵



『まごころ日記クオレ』
口絵



『本地正輝訳 まごころ日記クオレ』
(ヨウネン社 大正13年刊)函



教師としての賢治

現実には秀れた教師でもあった賢治の作品には、「先生」たちが重要な役割を担っているものが少なくない。この冒頭の授業も当時最新の銀河説をふまえた名講義であると同時に、作品全体を位置づける重要な序奏である。

『ボランの広場』から

初期童話『ボランの広場』の次の一節は、『銀河鉄道の夜』の先生の授業が、いずれ『ボラーノの広場』でレオーノキューストとなる人物の前身の胸であたためられていたことを示して興味ふかい。

(天沢)

私はよほどもう帰らうと思ったのですけれどももうこゝからでさへ一人では一寸どう帰ってい、かわからないのでしたしそれに実は私は全くその晩ボラン広場へ行ってこの頃わたしの考へた天の川のほんたうの構造を演説して見たかったです。みんなが歩き出したのでわたくしも一番うしろについてみんなの方へ行きました。みんなだまってだまってあるきました。たい松のさきに立って行くべムペロンのせながばんやり赤く見えまして。

『ボランの広場』より

同上挿絵

〔二、〕 活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まってゐました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちめの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしてゐるのです。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲ってある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたぐさんの輪転器がばたりばたりとまはり、きれて頭をしぼったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌ふやうに読んだり数へたりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云ひながら、一枚の紙切れを渡しました。

ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向ふの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと小さなビンセットでまるで粟粒ぐらゐの活字を次から次と拾ひはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云ひますと、近くの四五人の人たちが声もたてずこつちも向かず冷くわらひました。

ジョバンニは何べんも眼を拭ひながら活字をだんだんひろひました。

六時がうってしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなづきました。

ジョバンニはおじぎをすると思ふと扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨の一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなつて威勢よくおじぎをする。と台の下に置いた靴をもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買ひますと一目散に走りだしました。

「活版所」初案

この章は、黒インクで書き下しながら、試行錯誤のあとが著しい。初案では、ごらんのようにジョバンニは、活版所で最初二時間ばかり、自転車での使い走りをさせられることになっていた。(天沢)

「今日はたくさんあるぞ。」と云ひながら、いろいろな大きさの処書のある印刷物の包みを十ばかりジョバンニの前に出しました。ジョバンニは学校の靴を計算台の下へ入れて店さきにあつた自転車をつっぱり出してそのうしろの荷物台に包みの上書きを見ながら一つづつ順々に結えつけました。

それから「では行って来ますから。」と云ひながら自転車を外へ引っっぱり出して

してひらつと上へ乗るとまた町へ出て行きました。

それから二時間ばかり立つてジョバンニはからの自転車で汗を拭きながら帰つて来ました。それから十枚ばかりの受取をそろへて計算台へ出しますとさっきの人はしばらくそれを調べてから、「いいよ。それでは活字をひろつておいで。」と云ひました。

「活版所」初案

原稿第五葉



怪しい工房の匂い

ジョバンニは「活版所」で、「粟粒ぐらゐる活字を次から次と」拾い、「小さな銀貨を一つ」もらって、帰る。一体、何が交換されたのであろうか。かつて「活版所」には、錬金術師たちが幻想に耽った怪しい工房の匂いがあつたように、ジョバンニの知らないところで、秘儀めいたことが取り交されたのではないだろうか。少くとも後段で「セロのやうな声の男」が示す「地理と歴史の本」は、そこでジョバンニが拾った活字によるものだ、私には思える……。

(別役 実 劇作家)

一五〇〇年、リヨンで出版された『死の踊り』の挿絵。初期の活字印刷工房の内部をうつしたもつとも古い版画といえよう。当時、活字印刷は魔法のような不思議なものと考えられていた

活版所と大都会

そして私はその三年目仕事の都合でたうたうモリーオの市を去るやうになり、わたくしはそれから大学の副手にもなりましたし農事試験場の技手もしました。そして昨日この友だちのないにぎやかなが荒さんだトキーオの市のはげしい輪転器の音のとなりの室でわたくしの受持ちになる五十行の欄になにかものめづらしい博物の出来事をうづめながら一通の郵便を受けとりました。

『ボラーノの広場』より

やはり黒インクで最終稿となる童話『ボラーノの広場』では、田園で展開した物語の七年後、主人公は「はげしい輪転器の音のとなりの室」で故郷からの郵便を受け取る。「活版所」は「友だちのないにぎやかなが荒さんだ」大都会の象徴なのである。

(天沢)

これらは、活字印刷の歴史を語る上で重要な文書である。右側の文書は、活字印刷の技術や歴史に関する詳細な記述を含んでいる。左側の文書は、活字印刷の歴史を語る上で重要な文書である。右側の文書は、活字印刷の技術や歴史に関する詳細な記述を含んでいる。

三、家、

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスバラガスが植えてあって小さな二つの窓には日覆ひが下りたまゝになってゐました。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云ひました。

「あゝ、ジョバンニ、お仕事がひどかったらう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝^{やす}んでゐたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげやうと思つて。」

「あゝ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「あゝ三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来てゐないんだらうか。」

「来なかったらうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来やう。」

「あゝあたしはゆっくりでいゝんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべやう。」

ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思ふよ。」

「あゝあたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあつたよ。」

「あゝただねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」

「きつと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先

生がかはるがはる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で「以下数文字空白」

「お父さんはこの次はおまへにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあふとそれを云ふよ。ひやかすやうに云ふんだ。」

「おまへに悪口を云ふの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云はない。カムパネルラはみんながそんなことを云ふときは気の毒さうにしてゐるよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちやうどおまへたちのやうに小さいときからのお友達だったさうだよ。」

「あゝだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄つた。カムパネルラのうちにはアルコールドラムで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついてゐて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるやうになってゐたんだ。いつかアルコールドラムがなくなつたとき石油をつかつたら、罐がすっかり煤けたよ。」

「さうかねえ。」

「いまも毎朝新聞をまはしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしてゐるからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルといふ犬があるよ。しっぽがまるで箒のやうだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。」

「さうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「あゝ行つておいで。川へははいらないでね。」

「あゝぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一諸なら心配はないから。」

「あゝきつと一諸だよ。お母さん、窓をしめて置かうか。」

「あゝ、どうか。もう涼しいからね。」

ジョバンニは立つて窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて「では一時間半で帰つてくるよ。」と云ひながら暗い戸口を出ました。

《標本》について

「この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だってみんな標本室にあるんだ」——北の方へ漁に出ている父が悪いことをして監獄に入っているという噂を反駁するために、ジョバンニが口惜しげに持ち出す論拠がこの《標本》の現存である。ここには、宮沢賢治における《標本》なるものの意味・価値観の端的な現われがある。

童話『氣のいい火山弾』では、野原でみんなにはかにされていた「ペゴ」というあだ名の石が、学者たちに「実に、標本だね。火山弾の典型だ」と賞めたたえられ、大切に包まれて「東京帝国大学校地質学教室行」と書いた札をつけられ、みんなの羨望のため息に送られて野原を後にする。ただし「ペゴ」自身は、自分の行くところが野原のように「明るく楽しいところではない」ことをよく知っているのであるが、「茨海小学校」の「私」が、折角野原で見つけたやはりすてきな火山弾は、狐小学校の校長さんに「実に、標本です」といわれて、寄附せられてしまう。

詩篇『鈴谷平原』では、はるばる樺太までやってきた詩人は

こんなやもう標本をいっばいもって

わたくしは宗谷海峡をわたる

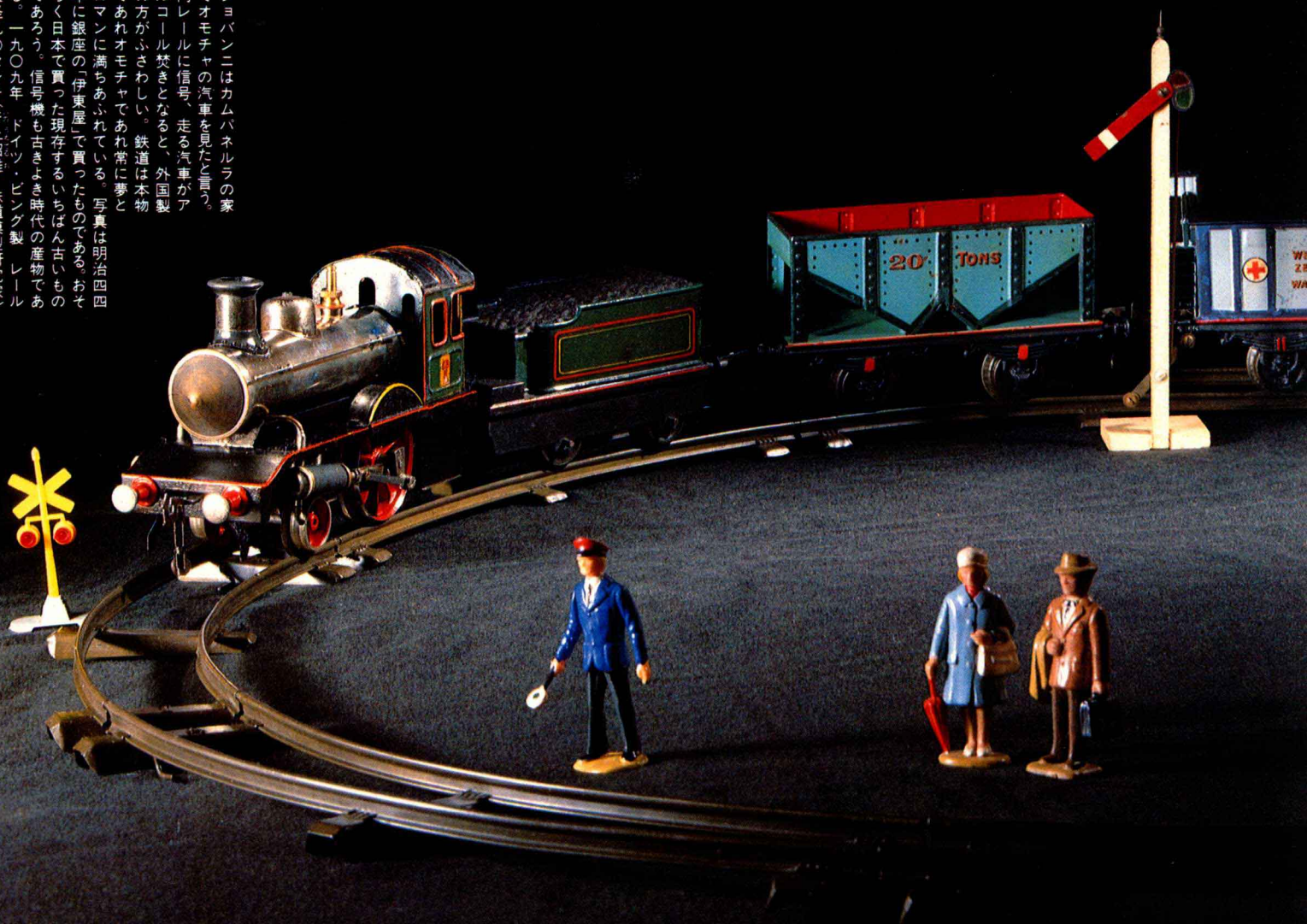
とうたう。この標本は、詩人が北のはずれまでたどってきた旅の諸々の収穫とその価値を、一種の茫々としたさびしさをこめて象徴しているし、童話『サガレンと八月』のまぐらの部分、何の用でここへ来たの、何かしらべに来たの」としつつこく風に尋ねられた「私」は、「おれは内地の農林学校の助手だよ、だから標本を集めに来たんだい」と「威張って」答えるのである。

見田宗介氏は賢治における《標本》に「現在の中に永遠をよびこむ様式」を見ておられる『宮沢賢治』が、少くともこのような《標本》をもたらし仕事で、「監獄へ入るやうなそんな悪い」人によってなされるはずはないのである。（天沢）



賢治が高等農林学校時代に採集した紫波郡蟹沢山の岩石標本

ジョバンニはカムパネルラの家でオモチャの汽車を見たと言う。田レールに信号、走る汽車がアルコール焚きとなると、外国製の方がふさわしい。鉄道は本物であれオモチャであれ常に夢とロマンに満ちあふれている。写真は明治四四年に銀座の「伊東屋」で買ったものである。おそらく日本で買った現存するいちばん古いものであろう。信号機も古きよき時代の産物である。一九〇九年、ドイツ・ビング製、レール直径九〇センチ（井上昭雄、鉄道模型研究家）



〔四、〕 ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いてゐるやうなさびしい口付きで、櫛のまっ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立ってゐました。ジョバンニが、どんな電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけもののやうに、長くぼんやり、うしろへ引いてゐたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へまはつて来るのでした。

（ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまはつて、前の方へ来た。）

とジョバンニが思ひながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりの尖ったシャツを着て電燈の向ふ側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがひました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまださう云つてしまはないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」その子が投げつけるやうにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ばつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るやうに思ひました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向ふのひばの植った家の中へはいつてゐました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのだらう。走るときはまるで鼠のやうなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せはしくいろいろなことを考へながら、さまぎまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通つて行きました。時計屋の店には明る

くネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくらふの赤い眼が、くるくくるとうごいたり、いろいろな寶石が海のやうな色をした厚い硝子の盤に載つて星のやうにゆっくり循環ったり、また向ふ側から、銅の人馬がゆっくりこちへまはつて来たりするのでした。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾つてありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまはすと、そのとき出てゐるそらがそのまゝ、楕円形のなかにめぐつてあらはれるやうになつて居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼくとけむつたやうな帯になつてその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光つて立ってゐましたいちばんうしろの壁には空ちゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかつてゐました。ほんたうにこんなやうな蜷だの勇士だのそらにぎしり居るだらうか、あゝぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立つて居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思ひだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張つて大きく手を振つて町を通つて行きました。

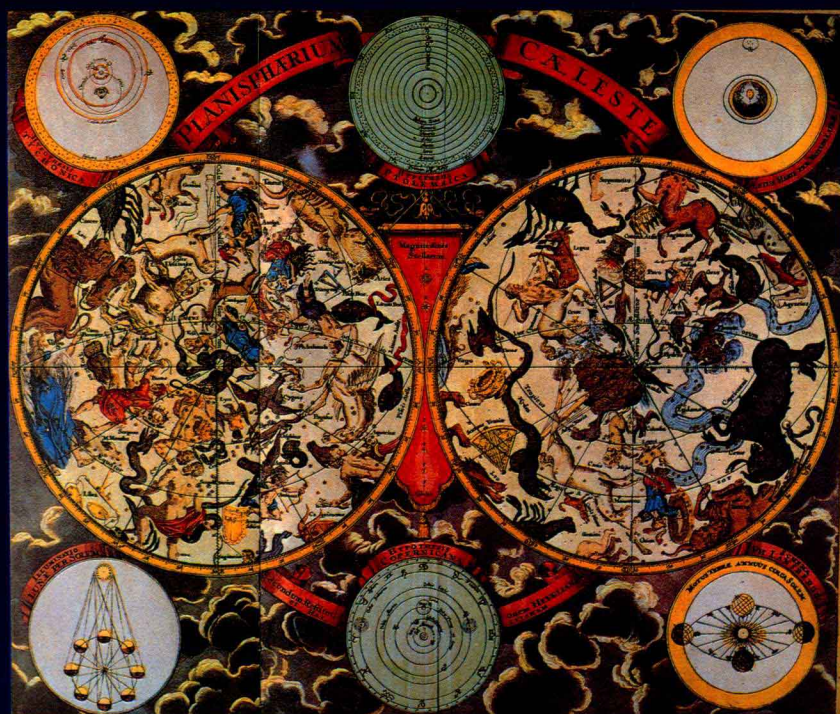
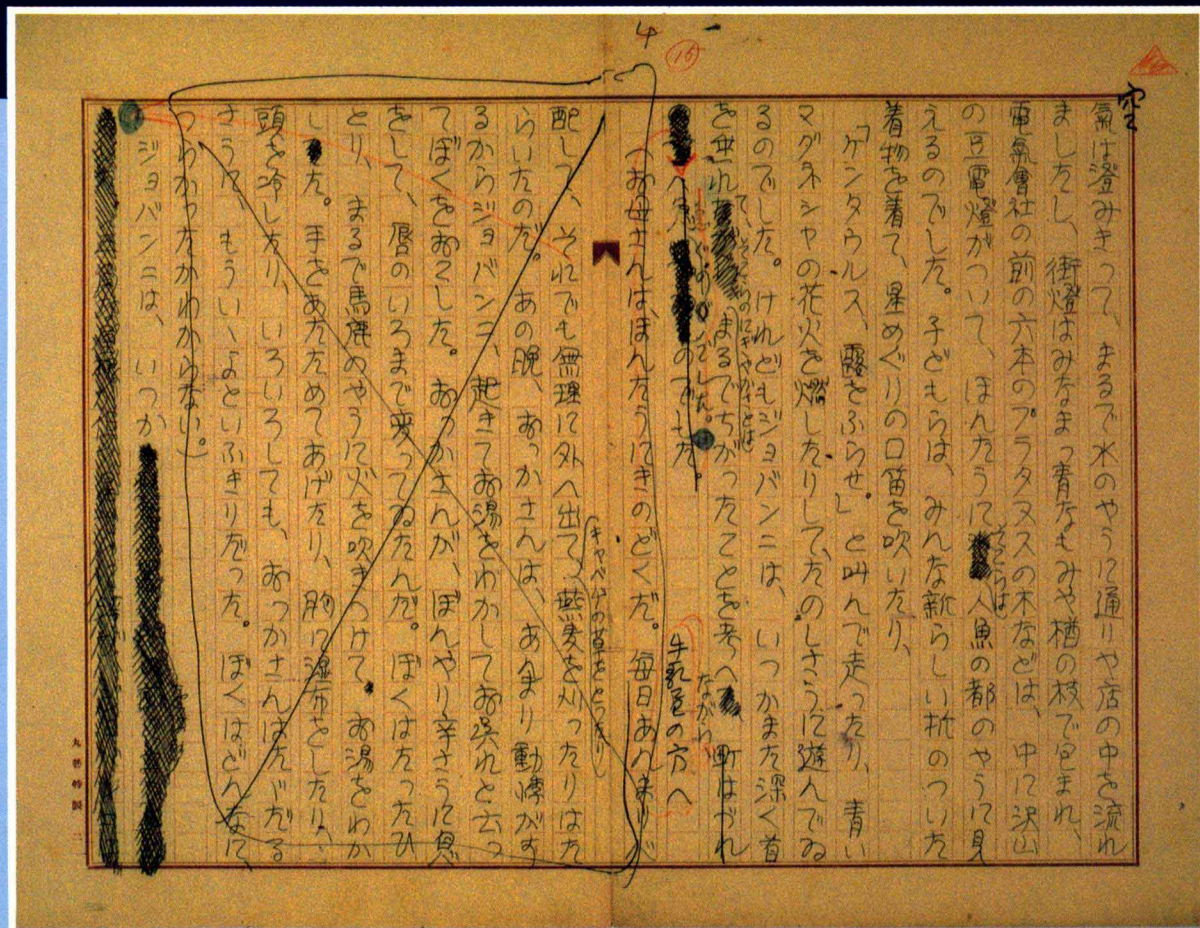
空気は澄みきつて、まるで水のやうに通じや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なみみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんたうにそこらは人魚の都のやうに見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしさうに遊んでゐるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考へながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニの独白

第三次稿までは「ケンタウル祭の夜」が作品の冒頭であったとみられている。ここではジョバンニの父の不在や母の病氣などの家庭の事情、カムパネルラへの思いなどは、主としてジョバンニの独白の形式で説明されていた。(天沢)

原稿第15葉



星座絵図 星座絵図の例。半人半獣のものや、怪獣、毒虫、器物などが、びっしりと書きこまれている。古代人にとっては、これらはただのおとぎ話の世界のことではなく、実際に天球はこういうもので埋めつくされていると考えられたのである。(斎藤)

(The atlas of the universe © Mitchell Beazley Ltd 1970)より

星座早見 よく出来た星座早見 その時の月日と時刻を合わせると、楕円形の部分に、星や星座があらわれる。これを頭の上にかざして見る。簡単なものだが、便利この上なく、天体観察には欠かすことが出来ない。(斎藤)



ジョバンニは、いつか町はづれのボブラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでゐるところに来てゐました。その牛乳屋の黒い門を入り、半の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云ひましたら、家の中はいいんとして誰も居たやうではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年老った女の人が、どこか工合が悪いやうにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云ひました。

「あの、今日、牛乳が僕んどこへ来なかったので、貰ひにあがつたんです。」

ジョバンニが一生けん命勢よく云ひました。

「いま誰もゐないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジョバンニを見おろして云ひました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したってから来てください。」その人はもう行ってしまひさうでした。

「さうですか。ではありがたう。」ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがらうとしましたら、向ふの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ま

した。その笑ひ声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思はずきつとして戻らうとしましたが、思ひ直して、一さう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云はうとして、少しのどがつまったやうに思つたとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」きっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。

ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いてゐるかもわからず、急いで行きすぎやうとしましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは氣の毒さうに、だまって少しわらって、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見てゐました。

ジョバンニは、遁げるやうにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたが過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかへって見ましたら、ザネリがやはりふりかへって見てゐました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向ふにぼんやり橋の方へ歩いて行ってしまったのでした。ジョバンニは、なんとも云へずさびしくなつて、いきなり走り出しました。すると耳に手をあて、わああと云ひながら片足でぴょんぴょん跳んでゐた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

けれどもジョバンニは、まっすぐに坂をのぼって、あの櫓の中のおっかさんの家へは帰らないで、ちやうどその北の方の、町はづれへ走って行ったのです。そこには、河原のぼうつと白く見える、小さな川があつて、細い鉄の欄干のついた橋がかかつてゐました。

(ぼくはどこへもあそびに行くところがない。ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ。)

ジョバンニは橋の上でとまって、ちよつとの間、せわしい息できれぎれに口笛を吹きながら泣き出したいのをごまかして立つてゐましたが、俄かにまたちからいっぱい走りだしました。「ケンタウル祭の夜」第三次稿章末部分

ジョバンニの孤独

第三次稿では、上のように、川へ行く級友たちと気まずい別れをした後のジョバンニの孤独感が、行動描写やモノローグをつかつて、いっそうよくうち出されていた。第四次稿の黒インクはその殆どを削っている。(天沢)